續五文集

中

中村俊定文庫
文庫 18
315
2

宮内省圖書寮

帝室博物館藏

像定藏

梅園

續五元集巻之中

自元禄元年
至元禄十年

元禄元年

きさらぎ衣集の後新春よみ侍

春ごとに花をはなれぬ友の友　晋子

人の紲(キヅナ)よ石ばらす　畨

春ごとに花を見ずいとゞく　晋子

春の雨と舎利唱ける

山城の小便買ふ桂とくの雨　晋子

何さ人乃夷の宮ゟ祝(ノウト)せん

夫婦のとゝ親しさけすハ　晋子

奉幣の浦菊かうらひ

杉の神木ス楠紫交ぜ　晋子

羽子の角ひろさ時の集り

白魚の海ヲ出るかな又似く　晋子

明けもて師走の月ハ初霜

寒吟しかく弱を美しへく　晋子

雪信とへく杉菅軒

鉦と切ル樽の伝敲の音ゆて　晋子

住かくとゝの書笈妓ゆ尼し

ゆのう無浦千新とおくる心　晋子

忘八の赤ゝ棒ゝ行くる

捨ゝ見ぬ杖子の新の思ふん　晋子

月花の焼を分ル寿のこゝる

夫の寿ふ花ゝ合の傍　晋子

幟ゝ野原つゝ思ひ出き

夕立も和うからぬ古ゝみ　晋子

活雛の庵丁セゝ山ん

大根ひきあふ畑のあるじ　晋子

見袋はし〳〵俺も関もう素

亥

色しらぬ手ぶくろ小紅粉をたうせろ　晋子

こよ和の〻ぶ稲の穂ちれ

月

世の月は涙ぶくもも俺とうぶ　晋子

やよ舟の面倍をちく院のたうとて

花

牛柱寺仏小乃遺址　晋子

院ようけうつ寺の盃

ぬりあるぬ九〻の印乳の如　晋子

菊萩の庵を尋ぬ

欣〻和ぶ第八水の如　晋子

誰ら来て裾ふ付ぶ夏衣　仝

恨〻る間ふ〻ふ〻まて

亥

静御前千年をすも歌　晋子

空悼の離魂の姿ぬ〻き　仝

亥

いと〻ぶ子を花人も名付ぬ

亥

やけと為〻見て作〻き小　晋子

酒熟き耳ふつき吉る私語（サヽノコト）　仝

秋花

花とさしそへ侍の一瓶　晋子

陰陽とうれき神ふ包ミ　仝

西王母東方朔も見ぬ人に

ちりや鶏頭の音はさしかき　晋子

あちきなや戸ふたさすを衣の書　仝

やすおりの窓も稀也秋雨

茶たく青ハ師走ありうれ　晋子

夕鶏冠の寒ふ猿の声　仝

月

宵ひとふ茶屋ふ茶屋ひ茶屋

ふいふかさとく伊勢の八朔　晋子

満月ふ不ふ猫を抱めを　仝

ゆまつ仏ましうめを紙子来ル

ひすをしを面実何ひ窓　晋子

乃をふも食の結ち恒中いて　仝

元禄二年

ふをふも月仏を向きを見く

中酒ふえん先歌雪の紅食　晋子

掛ふとさんへかをめうらの板　晋子

四幅対四の字盤よ詠けれ　晋子

嘸くく透(トウ)の頂香(チンカウ)くふかるき

下苔法ふ夏圃(タケ)ふまるると　晋子

きりの濃く蓼紫藤のごと

鱠(キミカ)とは出花が咲んいけを所　晋子

女文字史(カクバニ)の若ちうやう

鯖是ちき弓原　竹國　晋子

さかふ新茂の門のよ人

感ーとは鬼う詰を次庵の面　晋子

ゆをを打く母のをうも我涙

志ちう出く居る盜人の新　晋子

塩ちく咲く一株の雪

うふひ筆うをさかふ猴拓　晋子

玉造新波ふ庭西古郭

軟のちかうも巳ふ輪花　晋子

指ふ庭ふ神をかる

新ふ解鞍ふ鯖ふ世ふて　晋子

近宮よりあつめ消もかくるる

世方砂ゝ暦月日ゝ多紀　晋子

元禄二年

橋下宮ゝとゝ史の節

廿三　茶師の義務ふかゝりく　晋子

ゝの松蔕ゝ浦の雪

四月　鴨ゝ沒峯と入ゝ片月　晋子

及ゝ悲哀の小刀

廿二　はゝくゝと栗焼く窮よ多屠く　晋子

ゝゝ化蕎ゝ沒く山ゝ

蓋皿ゝて鶏ゝ多ゝ　晋子

平家の陣と第の庸人

船ゝけゝと落ゝ乃玉祭　晋子

畠の中ふ寸史る月新

いゝて世ふ飛後原彩角力　晋子

元ゝ京のゝけ清ゝん

花点　花多ふ夫婦出門茶さかゝ　晋子

蓋　神の結馬かけ原年の稲

梁（ウワバリ）　陽を冒して乃ち數　晋子

蝦蟇の子絶入るこの夜のいとまき

亦

小原から赤き身を震ふる　晋子

嚏嚏さきたるこの小廷丈高し

雪あかりいきん　寿乃入相　晋子

今ちんと云し牛小屋とりく

亦

火燈を踏出したりひかりつ　晋子

亦

子形書く点の浪と成るなり　仝

けとらべる出るふるい

花

花のもとに各曲ゆたかまつる　晋子

下ゆよたうみるや糸さくら

ワキ

犬も小さふも一日は友　晋子

星合の新やとなの出ん銭き

服月

節くゆ紋ふ所の屋のたつ月　晋子

ぢてハ倒ぢ下ゆをうつ雪

川沿ゆ立ぬ日は見の音　晋子

蛇のおとらしけのき八京藩

いけしう聖ふ我猫の墓　晋子

花もかなしてもとてはなるる

新宮の松のひまのさ若緑　晋子

ふきをとひ出る蓬被

楓はもとしてもとの枯のふてん　晋子

山〳〵暗よ時雨の濃雲

環着く月見る袖の多朔　晋子

寒霧やげふあて絲は大佛

穴井の渦を歌く葉かつら　晋子

蘂ふかき結ぶ蛍文

月

一節ふ東とその心月は光　晋子

濱風よろむ栢檀の交本立

唐禅の新をうけもう絹　晋子

見をとるる清水の市

宜しき名唯秋の月者の雪　晋子

住連の門比丘仏もゆるす

物〳〵〳〵〳〵〳〵夢と圓まる　晋子

ふもあり恋しよ悟を鄙ゆ

上年寄ハかくさ鬼やすき茶の伝　晋子

雑月

花

ワキ

角ゟ〻く男し久〻廉の皮

ゆく〻ゆきかの園の卜垣　晋子

白たゝしゝゝまわゝ月敷潜く　仝

ゝゝ

四ッの鈴ゝく軒のあさ風　晋子

芭蕉ゝ麓ゝ舟ふゝ意　仝

犀川の流ゝ月ゝ蓮隈

上戸ハ酒ゝる酒の盛やう　晋子

餐ハ児法師ゝ老ゝ〻ゝき　仝

志

月

帳ゝ麓ゝ見ゝ蕎ゝ

隈の田ゝ和歌の中月　晋子

二ゝ二方の二百所（ハテナシ）板小屋ゝ月　仝

ゝ海ゝ津の河ゝ数ゝ

花

鮫ゝ花ゝ月ゝ日惜き　晋子

何山ゝ地下の歌ゝみ　仝

英人ゝ

志

三世ゝの心信ゝ立て　晋子

かゝゝゝ年も悔ゝん　仝

月

すかせたる笠の秋蝶と共　晋子

生ながら玉かんむりの蛍かな　仝

感状をたれ月けかゝやき

漕ぎ行くや丹と安房の堺方　晋子

何もくさ浪の尾まとふ夕霧　仝

かたくなに沖出ぬ人の歎かな

合羽をはひて見せき雨　晋子

何もくさ浪の尾まとふ夕霧　仝

花もまた砂を立てゝ咲くなり

さくらふる似るを眺るくせとの　晋子

元禄二年

魚つきの絶ハまくなる波しる

右左わ絶の孤ノ見　仝　晋子

〻碑ほと只新よ月を見て

京なる君を思ひ出　晋子

中ゆる甲斐もなくぬ法法

傘屋なる何ふ紅の村時雨　晋子

紋尺を風君う掛行　仝

花

ちるさくら尼の汁椀　晋子

袖よりもうせよ雀の子　仝

青を折る親ふくらに花　仝

楫とる星のひかりに川舟

金箔を伝ふ秋の露　晋子

東寺は塔も加茂して秋　仝

出家よりかして張ぶくれん

うき月やむし洗ひ菜も流るる　晋子

はるみかぶ桂早梅　仝

去

主を伴ふ同じ茶の名

はし書の口すくなき海苔　晋子

氷よりもむ鮫のうろ

今切と書て海苔　晋子

人くしもなるほの茶

換梗成乃赤はちの表　晋子

蜆をすつる扇はもけき

瑞穂や粘新米屋の夜　晋子

かく迄おもふ方まも涙まさん

借金乞ハ酒ふやらうく　晋子

又きのゝ枝よりの木柿

孤つき高ふ枝ふ自ら新　晋子

高ものゝ歩ふかうく雪の年

吉血ふくふ一節の芝　晋子

二日の雨ふ加し〳〵　能町

髮新の田舎お撰をとゝ海て　晋子

所墓へのぢうらゝ歩れ

姉を行ふ姉や多しき　晋子

凡よ吟ま〻くかゝん疱瘡

老ふのお卦ふをゝふゝん　晋子

磯の月何和とよまる舟

秋は湯まく上鶴ゆく衣　晋子

まゝ〻ハ紅ゆ〻ゆ〻訪函

老功を所ふむく話よ軍して　晋子

冬の偈の竹は花ふくと

せゝき遊をふゝと鹿牛候　晋子

郭公背中尺をゆる蓼汁

ワキ
オ三

旅なれさ山をゆく心夏艸　晋子
将人のさうにけく宛名よ　仝
月うと滿をうし赤借屋
年ハ世秋　大業舎かり　晋子
時まし表羽田ホ屋姫を入て
子持印とふ母乃　保つく　晋子
殊持の茅舎ふを表ある
七ツ清き世に菩提瓜のう　晋子
おとふ事二ツのけうを長ハ

花

花の名も田舎ふとう案　晋子
所付よつれたう行や横朝
舅の紋とんゆるきけうき　晋子
事風のるまり和歌代
いうあれ開よいをくつどう　晋子
稀人よ滿賞姫を原ふう
さてうん月とわめて居る案　晋子
ほさ事よ蔵ふうる嵐たい　仝
世ふとふ蔵中の秋

月

亦

武蔵ハ兄ゝ合点を浴せかり　晋子

さらす郡のえめ氣の毒

亦

富士見よ衣ハ深て袖の色　晋子

六浦のうるの曙　乃こ

月

くめやうえ海ゝ杉と指ひ

其日の祭具見えて村　晋子

何者の彫りもしらぬ道の屈　晋子

はりくて富士の白雪

月新も鼻の先ゝや加わらん　晋子

亦

振袖の羽織すしゝゝ袁の上

おれゝ子細を関の明神　晋子

累代の道のあさハ梦もしれ　仝

ふ苔よ

蓁白

扇をゝゝさで帳の　晋子

ワキ

夕立ゝゝ

裙（ツマトル）　袋　年華

茅葺牛乃へぬ花川ゝ　晋子

花

[illegible]
凡千年よりさかひけき　晋子
変化ちに乗る宰人

寄の白焼飯二ツ　晋子
下級の結び目うるき志し州

小便あるき秋の何く海　晋子
名月日よし酒むく人

かくや姫くせくふ花ありく　晋子
蜂の巣ハうるき物の上く

月

一時責の浴馬也さ涼　晋子
ぬるかるる形に涼まけ

宮川よりてるる月の影　晋子
ひけあつ笠ある動き

人よ雲ちあそふ傾城　晋子
柄うちちく扇ちよ風

舟の料ゆしきハよさ入今　晋子
灯をちて夫とさらし瓶の皮

うき立ちる雨くのる机　晋子

月　遠藤菓子屋菓子小新くらもち

月　甲斐青やけやふくふくふくの月　晋子

湯次まて巳十月湯も有候く

下弦小焼天ハくるる月新　晋子

市と田ふて残うるぬ町

高方よ古き仏を寄りゆ　晋子

白さ小流れ宵中とかつくん

青葉よ人ゆるまへ　晋子

子施餓鬼ゆる　松の月俳

鍬さ新小坂よ乱て秋の風　晋子

我年よあるとと娘盗出し

恵ようるうる　晋子

稲元の芋屋もつ女ち日

うるひすう乳母ら慰心　晋子

のふんと毫上ふう元寅掃く

ちうるう井ふをのむ月ひろ　晋子

月よ義信のもの名と向

叶度ハ也後ちの　晋子

七月

一 籾をこの椀い梦ゆる村の秋　晋子

麦の種さへとりめあき世

何たる屋の裡の穴をふさゐて　晋子

夏の乳つく見ゆ小屋のこぼれ

物うるゆゆし　寺乃門前　晋子

赤一点蓮茂まての夜宝ふ

月はあれしなると廉の落る郷　晋子

武士よ加茂の旅のつるまい

亥

稲さへ国の赤とかるるかり　晋子

むさくとなるさ砂とそひる

さるる山毒を惜山史（モカキ）　晋子

ちる屋う泪瓦よ藍しい

汲みて井の鞦の氷（ツラ）拾ひ　晋子

十分の盛をもん花の名

焼筆あてて裏山く　晋子

紙の左夫よ眠（ナミ）うさわれ

亥月

旅するさ雪ゆ揚屋の月をんて　晋子

新しく以鶯なりしうぐいす

ふ八 鶯ふとうぐいす 移秋 晋子

是いろのうぐいす 泛

何ぞ也 別に筆硯を注ぐこと 晋子

はくとくと秋ちりまと跡者

秋の光 稲ふ 紙出のしうう 晋子

汁を ふ 赤のいろ

泛るる 聖の文字を 世作け 晋子

地 の 竹の嵐も 名うし

鞠をつくしく 出 之 晋子

雲の 林を 鶏の 家

花

楽 ん と ふ し 旅の花 安て 晋子

元禄三 年

風よ ふ く を も 名う 門

ワキ 火 へ へ と 起 叶 の 糸 晋子

月よ の る 桐 の 葉 舟 ふ

ワキ 夕 ふ く 法 ん ふ 名う 宿 晋子

うく 語 る も 迫 く の 秋

才三

すまふ力士の男泣をしく　晋子

ワキ

鴨のこゑ仕り寄る池　晋子

屋根ふきけく牡しき宿

何とはさふ七月の泊こうら　晋子

浮草をとふさ蓮すの鳥

亥

こみちふかいく紅葉乃紅　晋子

少ちく猫の尾とふるる

白雪ふ力士をかつぎて　晋子

月

政所（マトコロ）れかあれかをふ景　晋子

徒ふ陽子高年の月

宗匠こうとはつ〳〵の行

花

めつらしき道を新うる花の宿　晋子

夜日ふけいまふふ横井て

帝子の吉さいまうら弟九　晋子

山坂部と俗車押せる

今や旅る祝言ふ湖（ウミ）を

きあくの夜弟ふ員て倒る　晋子

立てしも楊枝を折し繪堤　晋子

岩梨つゝる馬ずゝ神

岩を孝とハ云し月姿　晋子

見捨（ユル）て拝（ル）さ花月代る宿屋

めつゝ思ひ出らるれてもけす　晋子

つゝと素色のおの立中

柳柳ハつゝ色の木屋ら枝れ垣　晋子

本樓の外ハ垣の内ハ菜

紅の奥新ハ月ゝ月ゝん　晋子

帆柱の入ぬ沖ふ秋時て

ゝゝゝゝゝ崖ハ苔も傷まく　晋子

根つきゝゝゝゝゝるもの外漿

不ゝゝ六浦の半ふ沙を投心　晋子

多ゝゝもゝの殿の年位

土堤へ何うゝゝゝゝ猶流る（ヤフサメ）　晋子

女使ハこゝ思　扨中

簾（ツイ）ゝ揃（タテ）ゝゝゝ居宮中ゝゝゝ四き　晋子

人ゝゝの秋いゝゝる波し寺

月

窓梅一ツをさうんとうつ　晋子

古風小倉山百人一首　杭ゆうく

麻料（シロ）を塩もて塩の入汐　晋子

撓竹隠よりのぼる延月

峰雲小笠原の旧のたまゝ　僧（ワスカ）し　晋子

糸尾のあきもおもき竹立桐

多竹も大竹千因（チナム）　老犬　晋子

初しけの名もかゝる青柳（アヲヤギ）

笠寺よ十八日の月をとんぐ　晋子

ワキ

オ三

こゝ地ゝ名八再をつゝき　晋子

立ワ年の限を刺を酒つけく　仝

庵九の梅ゆもれる月の新

ちいさき鏝（ユテ）をやゝふ　丸窓　晋子

ゆゝべ雲紙の泥（デイ）のかゝるん

最後の夜忘も人の代盞ち　晋子

月もつまゝ仮ねもおゝ紙名史

ゆゝつまゝ冊よ寄日　遅夏　晋子

俳者も幸くあら網の味
年玉おくて礼おくれん　晋子
柄糸ふまを作をいふ丈なれや
小ぜ〳〵絵る花をかてふ　晋子
法師の人か答そ口ふ
いと〳〵師走の市鳥　晋子
月ゝ花をにのう詩をとと
旅をとゝ仕る仕る井三　晋子
このもろ〳〵みちく事ぬ　仝

二日　搔（スカ）初そうゝ心数の香　晋子
楽材仲くさうしまふちす花
尼位の所　桐の　唐傘
目病ども門ゝ立る名口新　晋子
子ゝ走ほうゝ腹犬の乳
山の井ゝ和を走仕や流乃け　晋子
彫の白きふ高面の絵
振袖をと刀のろゝ斬うけく　晋子
ゝをくゝとゝ行ふ　盃

月

浪の月波戸の泊もきつみれく　晋子
稲刈とく初尾かつる岩崎雲
家ゝ〳〵武蔵国玉府　晋子
市人の肩よ相たくゝゝ　仝
唯花のゝこゝろくゝ　塩烟

アケ句

まゝ子なさめぬ鶏の初音のり　晋子
勝小京ハ羽織をもく長く
絃よかく弾ふ障子張めれ　晋子
山一ツ皆鄰躑躅ゝ夕月夜　仝

月

小舟さゝかゝハ上ゝしく敵
鉦の音もきふめつゝしや長長伝　晋子
夫ゝ行ゝ者ゝ少ゝ
出ゝ行ゝ人ゝ西ゝ上ゝ信舟　晋子
引ゝ張の山を人ゝ出ゝ
島ゝ小家の立ゝ曲り坂　晋子
夏ゝ夜ゝ夜の月ゝ樫竹
古ゝ君のやりて留ゝて行ゝ　晋子
戒名ゝゝゝゝある人

燭の明るあるをふく日をくらし　晋子

鶯ゝ鳴る　ゝ月新

花

六條の院にて詠めて花くもと　晋子

数くを行かけて織

恋

冶部の結馬高紋よし　晋子

振袖のからゝあるゝ物遠い

いろゝ絵を尺八よ　晋子

松風ハ美のゝめ風さみ

一貫あれハ　まて行く　晋子

恋

子を呼る人遠うゝ

恋

唐き恋ゝ恋のからゝ　晋子

文車やゝ扨方行る土用干

乞ゝ俵を女禁制　晋子

清月はうゝやゝけかゝ人

秋の瓶の草を蛇ゝ　晋子

小便不習ふも恋しゝ

ゝめ踏をも不小唄育　仝

ゝ像子をめて生る孔白髪　晋子

小夏りの太刀の末ふかけれ　晋子

土田八百く植ても苗のつや

未よいく儀の多ち宗川（オサ）　晋子

鳥よ出数　三條の音

糸竹よかくもく行まる業の丈ケ　晋子

うら辺く酒屋の座よ涼しん

多西さ多しと餓（ノ）種（ス子）と千ス　晋子

屋敷ふる意の長き西

茅ちつきと食の玄関人まれよ　晋子

清途の社ちと川ちと の秋

ちと就神の名ち風い吹　晋子

ちとく寒く寒る雨

亭主如屋ちと語ぶんぶと　晋子

月の玉の出ち水見ふきて

京死しちと枯那ちん　晋子

五ツち　出ちれ出ちと種

伊神寿よ京徒の渡を輝し　晋子

いとかしく芭蕉新百化の蓬（ムキ）み

多佐く秋とさつぬ蕣の実　晋子

酔てあるゝ梅の下叩

春の夕三十門の宿き蹴て　晋子

寺地ひつちまとる芹の花

ゆゝしらかなてい菊とる犬　晋子

組天井八天人の数

銅蓮の夕ふ翠羽の新たく　晋子

一面よ法師の夏の夕きう

滝ゝ勝ゝ　かゝる　盞　晋子

志仏ばうゝ傳ゝや夕汐の舟

一二三寐ハ景の夕月をあさて　晋子

風葉をさしく成る大和川

次ある武者の年を問まく　晋子

ち作ゝ奇仙もうけ雲

佛ゝて禅とそれる唐の秋　晋子

唐ゝ紙とるい桂女めく

おりひふゝ利休の切口　晋子

仏を作むとさん一拍竹

出ずとて千人切をなげうん　晋子

時人の新詩集も花ちる

ちるさ及古ハ惜しむ風の尾　晋子

冬ハ杉結下の袋しき

番ふとりそふ杉寄ます風　晋子

初水の好ぐふ結ふ髪

庵セーチの何ふ装てすゝ白　晋子

さまくふ割て乃ちさ栗姜

ちけ　乃ちさ風　四五文ゝ菊　晋子

翌ス の芭蕉と共に遊ぶ旅

魚とる舟大服さしも犬おそし　晋子

草敷よ花桂ゝ奥の庭

蔵の百さくたをちゝ　晋子

新子の芋ゝ百性と呼

公ゝき詞ふ籠を沢てやゝ　晋子

芋ゝ百ゝ滑と撰ぶ

こゝふも初ゝ寄ゝ　晋子

待ゝ山もゝふこしもと

秋とと玄扇のけて色く　晋子
朧なる月ふ玄既を送るれ

花

花も柳もつつるふ　宗論　晋子
心旅いそ〳〵暮るる　日は色

九月廿五

わさ〻川廿色の柳をふとかき流し　晋子
犬ふ〻ふ淋しき庫の物ふ北や

九月

揚枝をふしく打吉仏　文　晋子
川面ふふ揺ふ芦の葉ふ
月しろ〻〻〻流れやむ　而　晋子

箸をのの吉仏　棟上の梶
初雪を師走よ初ふ〻せもや　晋子
人〻をとみて新し乳芽歌
雑ふ白仏の　七夜信仏　晋子
乳とと芦の唐の立竹
弱の簇をふ生れく色行つる　晋子
秋の〻ふ孔王子へ為く出番衣
神田まつつふ出　を　兄弟　晋子
西芋も屋〻る　寿〻の夜

亟

いさきふハ蓋含くひよハ初茄子　晋子

茅戸ちらの所の茶ふきちらかり

今の間よとゆる　盗人　晋子

ゆきとゆりしひ所ゆり出く

月

沙多羽のちくもくも鉄よ於く　晋子

雲の東ハ柳次の七紀よ後ちし

子ハ杖よ多ち　光の小便　晋子

立ちとうくくもち　李凡

名月の竹を見ゆる　村雀　晋子

むさかうち岸秋稜一帳の赤

萱う厭名しよ亟く後　徑　晋子

豆（キ）蚩（ラス）の帰家の碇ぬ名表

花

初花よ多ふまくく氷道の言　晋子

桐の芯ふや土用の中もを多日

ロキ

ナシ

簾を立ふ初月ふ又を　晋子

入門よ亟ちぬ無の樟をわて　今

照月よ灯立く出むし

服を出やさぬ　三三藤の秋　晋子

旅にあふ艇よりくる国まで
月清をしらに二階にせき　晋子
あふ東宮ハ貸よ入くる新り
作りあき稲ハ指もはくしん　晋子
摺シ舟を茶屋もひよりあり
立て形りよりに幣の神丸　晋子
雷匠の碧衆色洒の附
四方の秋凡よ蔦とる山　晋子
遠の多ぬ書をよむ程の窓の月

蘭よ作きくる嵐やさしさ　晋子
客人(マロウト)よ瓢ハ帰(ナヤリ)し花の時　晋子
仏もつとしる涅槃会の夜　仝
小住居ま又建亜次庵の居
連奇亜の定まし　風
杖作も芝るもうとふ突かる　晋子
石切の多くく門の夏
とゞ奥も何ともや法凡ち　晋子
寸子絵と凡面の松の秋さ

粽ゝ世と共代を経る人の風　晋子

掃屋をとゝくもとり暁

新らし仏菩薩ハかゝき亥の周　晋子

孤の凡呂ふ入るとの月

が茂川よりと名ハ流るゝ凡茄子　晋子

縁ゝ色をかき西瓜の初荒

本堂ふとはゝ公くさ念仏　晋子

筆もくゝ多つゝすものふゝ

散まとゝ夜来るあゝ花盛　晋子

アケ句

かゝゝ仏面よりふと多帰く　晋子

風のけとうゝ送れ関舟

入海をそゝ浮るゝこ多　晋子

元禄四年

たけて厳の先をかゞ打

苦焼の売を投ゝ風まゝ面ゝ　晋子

稲初尾セめてこま発と脳ゝ

角カゝ風子ハ似合ふ下節　晋子

きけきゝ人色とゝゝふ亥病

寄世し紋て奉る花ハ多　晋子

修復の寄めふ二度ゟ社司

猪形りの釜を作る雲の風　晋子

漢の三きばも猫何ぬ換

哀

きぬくゝゟ猪の徒すきまき　晋子

包ふ鶏形ゟ種

鶏ふ大きち知る栗の音　晋子

二年の猪もかしこくもなて

孫まてらく閑閑ゟ長　晋子

たちうまてもる中ち後の郡

抱ゟもゟ兄弟連ハ命ゟ老ハ　晋子

裏ゟ俗名を書ハ石塔

世女房ハ十ゟ人　晋子

哀中ハ何ゟやせし夜長仏

人稀ゟ夢ゟ冨の苦ゟ為て　晋子

木の葉ふ横く竹の火葬の煙

旅人ゟ付く宿の魚賣　晋子

別れゟ山ゟ絡買ゟ馬

亦

第秤の石の蘊も片れもし　晋子

亦

浮舟の袋うとまるふ色の中

算をうつ〳〵弟よかくるゝ　晋子

喰さま〻綱も志ますゝぬ蓋ホ

吸ケくゝやゝき遊人の屋　晋子

口をうつせく素ゆふる

彩ヤウ糸化月て仕りん形イイ糸　晋子

而化の痛ふさく浅舟の中

金のを指ふさ人を抱ふう　晋子

亦

亦

亦

村女ハ笑かゆるとも反元

先キを酔ま京傾城の下戸　晋子

性をまつ河りく英安を抱孫

絡の貝ふも膠ニカハをぬ多好　晋子

対して汲ゆ神ゆのう

法花よ箱面テをいくきて　晋子

元禄六年

門立の浮世ハ盆の十三日

はかけ花糸よ　朔の帰　晋子

江ハぬる山巴方屈曲蛇造

雲ちかき富士ハ探幽　晋子

おかし駒（コマイヌ）すゝる　貂

いけ人よ赤子の匂ひかゝん　晋子

遊しかる枝の幸き肉桂

市ハ美性安きゝる叶枕　晋子

芋紡まく窓の灯高き

只仏名を　盲　禅門　晋子

三年月まハ萩垣乃虫

寸三月

月高よ級幾かゝ笠徑りく　晋子

買汁を神ゝしゝる玄の風

亥

かゝさ亡八の杉檻を人る　晋子

後を拉る茅の仕習ひ

戌先キハ志恵よ渦田川　晋子

狂扣さへ角仏の連

亥

こゝかくて大ゝ神の浮勢糸　晋子

解口の音羽の滝ハ長雪

白鷺所の冬枯の山　晋子

寢てもとる子を母の足敏

貧ヶ乃つれの風ぞいとれる家　晋子

下(アガ)毋わり物多つゝき物ゝて

五

乃つの色しく人の指をくひ切る　晋子

菓菓紙よつゝき菊の香

秋ふかのくこゝを地をやる屐(ケタ)の音　晋子

蟬九月に成り花の文

アヲ句

光の音ぞ花や庭の茅牡　晋子

わさの風や拾ひ花の枯ゝて

ワキ

五

蕎麦の菌の　生ぞ　ゝ　洲　晋子

帆先きに白ハ脊(セナカ)　駈る月

紙ぶしく田舍屋敷を奮るゝ　晋子

何年ゝ書ぶ小書ゝ紙石の塔

埋井ゝ立ゝ　收花　晋子

細工ゝ知れて悪ゝ人

奥ゝのうゝ乃ゝ遠ひ柳　晋子

姐ゝ出ゝ　ゝ　料理方

出ぬ　ゝ　生海老を郭公　晋子

津柿雲く村の雲白
白雲のハ高面ちらし花のお　晋子
むうしんて世の凡俗ハたりお
糠(コスカ)を行ふる犬ハ痩ちて　晋子
市の魚のかくて多作
曝(サラシ)ちる昼食ちふや椿の花　晋子
燒さしい小雨家をんちちを嗅
雲の月洗ち星ある　月
徒かいきてのあるる　大船

放人(サスラヒト)先ッ蛇ふこちと冬深　晋子
仮屋形をれられハ麦畠
京以祇の俳ち　腰色と　晋子
花の時ちよ一日ちの体
二百ち相人よちちぬ去の石　晋子
雲の名を雁高ちひ
化粧をちちち身分の殺　晋子
乞食のちる　哀の一石
霜ふ没ちちの月東ちち　晋子

[illegible]

[illegible]　　晋子

素堂一さいよりとき自

花の伝婆くの居くさい小町し　　晋子

懶惰の仏とさとるもとなるか

祈らて被ふ　俵塔の餅　　晋子

代屋よ　似くさい　萩の雫涙

牧原の[illegible]　　晋子

皆苦ハ[illegible]田業の後の月

秋の名残の家ゥ　杖突　　晋子

原夫よ賣い酒屋やはしき

[illegible]て物やもへを大呼て　　晋子

田川の小袖も[illegible]奥深

かくらら行ける橋の[illegible]　　晋子

角力を筋に村のきち入

[illegible]の秋[illegible]切をと　　晋子

[illegible]も人のるもうなく

三更[illegible]江戸橋の雲　　晋子

さゝやこいはけむ夏草
蘇(ミヽヅク)よさへ〳〵庶子の家うち有　晋子
照る月よ祢宜の化粧のうまく
彩雲の彼舟後あけし　晋子
夜明の雑子の山の蘭氏
立むしし何あらしれ玄の風　晋子
蛍火をたゝの拾ふ草庭
洗濯の為数多子うたけ　晋子
涼ようむ新の主竹

月

ぬるみも沼のそだむ面の月　晋子
蓮の実ハ仏のつまし粮なん
形すきの後よたるし　福お　晋子
とうりはさへ男性をしき
戸杉やまさて書ある翼の尾　晋子
撰集拾遺の法を屋うく

五

内のさゝ子ハ女後の一得
元禄六年
ゝ丹月の水足かうく

氣吾子宮に羽織を掛る　晋子

柄み下ける小田の捨秋

枝を離て雲住る岩の上　晋子

その神歌を似て吟ぬ

二十四五まで宮まゐ　心　晋子

加へを書ふ祝言の酒

人かゝも接移るいしゝ武士法　晋子

弁の蓋を敲ケハ水ち京の月

納屋ハ寒ち夢ち借る三猫場　晋子

月

法雄金をのけてれく春

初太刀昊空の俤の幾京　晋子

秋作ハ口うるさき御きく

坊主還りハ石牡丹と宋　晋子

野紙のうち横ちさ書

草靭ちしらふ屑る峯ち月　晋子

樗の木ち椎茸の出る雨ち

半田の庚の高ち高ち　晋子

秀額ハ眉ちけく　川む

誰を雅の文殊普賢ぞ　晋子

咲る花を仏とかぞへ後

施薬院より茶毗を摘　晋子

元禄六年

蛍も亦心ハ苦しれん

かるみく第は夜川涼しき　晋子

秋の花ふれ切籠の柳

佛くも人やろうん刀拾　晋子

げ出り雨ハ志かぞの浦うれ

鐘も只鳴し老乃　称名　晋子

うさはしもふ恋のやえしは

山の神蜜戸をきうとをし雨く　晋子

煙掃よ笠も世界もかうつて

寺舟よ西を見ぬ紫ありと　晋子

四つの鼓八月のおりの東

花の床三宝加持の紅梅　晋子

うらぶよハかうし者と角螺

拾る舟まても有る一の日記　晋子

神うれ山うま書のよはせ
かとうまはれ已の十刻も一声を　晋子
数珠切ゆうゝ悪所のうへ
醉うゝ庐山乃こうはあきをの　晋子
ふとらう髪も肩の絡あけ
月の宿さうはとうふて宵ハ　晋子
木好キも無用ちみちう萩
小神てハ切なくさみハ大祭　晋子
ゆるうゝの魚うる舟

月

やふ人の別しうをあれ後をうし　晋子
花の後ハ江うて負う老平宿
二つあうもうく枹ゑうゝ　晋子
夜もさうゝふ旅の菜く
うゝの菊をゆ用うる姫の子　晋子
神ふたれうゝ梅仏寺をを信し
和田恩和ホう和行ありうん　晋子
もをむしうふて信ふる維
ゝ朝も童ふ百うる素ハ摘さ　晋子

世界初めて恥しき

尺七女房よりもてし唐紙　晋子

行燈より鶯　紅葉を切

けしの新芽　茶の湯哉　晋子

春の雨へ泊て啼し小船頃

散ちらす雪　浮世貫　晋子

部屋　桃しら酔さまさん

結氣の証拠なし　俊ろ　晋子

白妙垢の裾をまくぬ下谷道

占ひうセ神子持宿札　晋子

おかしかるまの老先の吟哥

勾菌の苔ふかき西山　晋子

物喰て酒呑後ハ茶屋川

世界の景よりし我山　晋子

山角数よ弟衆と尺寸稽古

敬くよ居ろく寺とく灯と色　晋子

懸の行燈を酔ろく押寄

月　芋の月廃の家乃れろし　晋子

門の柳をとるかなくゝ悲しい後の山　晋子

ゆゝしの書きはなるゝ梅雨もはれ　晋子

親の家をやきまぶれ　晋子

行水をうめよくとあかしく　晋子

一芝をかかげ商人の考おゝ　晋子

やまもとの下戸や青の月　晋子

きふの刀帯てきぬる

濱焼の月を不らきる花の庄　晋子

雪を絞し半井乃門

孝行をもる食の中まゝ仕ゝ　晋子

送て仕て送ゝ足ゝまゝ下流

旧月の後といをぬつゝ行ゝ　晋子

小屏風きゝる杉の鑿口

町セまく階子をけて踊尺る　晋子

利木蒲菊のきゝ行者

扇の下へまきれ　げゝく　晋子

俳屋の仕まる白山の温泉

志門の家精の新のやまくて　晋子

大枝ハ花盛人もあつみ哉

発句　栄よかるまと蔦の子　晋子

侍ふむまたは初雪の竹宿

オ之　月あるくはゆきを引へき　晋子

岡よりあるる新綿ハ山の寺桃の青

肩て風しるふ駕うきう親　晋子

亦　むかうしや襟へさしの姫の泉

双法成と高やセうあく　晋子

三すの球をきる心　唐

月　まゝつと嚔をとやしれ相の月　晋子

山の多るあるく沢ハ志けうあり

初ふるかるう金歓の下圃　晋子

焦ふるふいるまを焼

亦　乃ゆるとはうを人を高をきれうあり　晋子

波しうもんの彩ひくき原

松うけを近江海うハ沢山小　晋子

舟人の裸小笠やきの峰

ワキ　柳を出しうく川を花　蟬　晋子

柄をたるふ月の東すから　晋子

躍りて肩をおさへて森へくり

抱いてめ代もるふ京の風

白を吟る二の汁り盃　晋子

星おとしらき岡の霧謁（クモイキ）

見ちらすく京の襟嗅く別小　晋子

おうしふ者ちとるム川養垣

神ハお模ふこれくと鳴ル　晋子

ちやむりをかへ東京のるめ

月花

食のあき志賀の山越月も雪　晋子

ちの日をとるる芝の多新

雛祭ふ笠先の椿ふ鳴鳥　晋子

を分ハ乳母汁ふり偶偶師

お茶よるる　茨の板廂　晋子

荷をとるる生る巌出る水

傍ハ皆耳を寒くかる山下風　晋子

慢らふ卯の月利笠ふん

酔へる力のつるき　傾城　晋子

まる儀も皆同じ事

初鰹きと女とハ買く氣あるを　晋子

下のやうな女よ成て花の傘

アケ句亥　山吹打てく三人の　亥　晋子

家椿（イサヤ）も八重ハ木槿とうゐうゐて

秋よりも赤く見る京昆布の色　晋子

樺（ツル）の石の歳る哉の夜

忌淺を拵て公うれしき　晋子

一時ハ揚屋の燈を吉ゐまりく

亥

股立ちまれる雪を　雪さく　晋子

雪の多ゐ中茶ゐる酒

秋の菓も松茸と編　晋子

赤面や俳り碁石のうつき

下京をとへて百姓の　脫（ナウ）　晋子

さかのくと追ひ舟の赤いき

一向宗乃南无阿弥陀仏　晋子

法後出免の樗さく門

切レ船治と吋よ中ゆる子就　晋子

木曽なる本流ゆる月の川音

百性乃浪こゝいちゝ年ゝ秋　晋子

初魅やくもゝく花の前の宿りん

月

月ゝ舟あゝて新酒ハ船し　晋子

辺と行を又すゝるちゝ柔

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ　眉　晋子

巻ゝ柔の巻完まる園の音

傳ハ男猫　武　方ハ　妻　晋子

縁つく後家のそゝ小ゝ柳

恋花

花の皮屋天町やゝゝのゝゝん　晋子

二三信汁椀芋麦ゝゝゝゝき

馬ゝ学ゝゝゝゝゝゝゝ逝る　盗人　晋子

一ゝ屋　樓て仕ふ　松方

ゝゝ京をゝゝゝハんゝて　泊ゝ　晋子

我ゝゝゝゝゝゝゝゝ　調ふ古面日

恋

ゝゝんをゝゝゝゝゝ恋ゝゝゝ　晋子

柱詩の舟ゝ旅人の月

家の音瓢覃ゝゝ履ゝゝゝ　晋子

下市のとまると踏とる花盛

拳句

弱の杖の後の春風　晋子

鶏のとゆり来とりけふ暮ゆる

笹の塔の移ふるやうふ西深し　晋子

手を伸てかうとる酒の燈

庶

杉戸にくし日移りけり紅　晋子

きりきりはきはきと爵と鶏

ちらちらくと氷柱はきふ清ふ

舟積を怖よ寒ふる池移　晋子

屋漏も伊勢も十分の作　晋子

四角て罠ふ此春杖

彼岸中ふるハ湖の蛙ふ来ふ　晋子

元禄七年

新年小日庸ふ寄る貝吹て

月

月乃陽ふ四扉ふ門　晋子

祖父ふ手ふ火桶も蔵すすし　仝

下京八宇治の農和さしつれて

坊主ふ寒ふ義ハ松ふ歳　晋子

足怪ものすごくて居るハッ下り
息吹くに窪孔の針　晋子
田の畦ふる苗把て投て蛙
百姓のうさ心編笠の花　晋子
行燈の月ゆしさ浅紙文幾
新小町見てうつる鏡乃月　晋子
新綿よ鏡のさりはい雪くし
唐のうつる花おうるく　晋子
要之の梅は梅の花ぶち

むつまじ夫あり去のうたてをく　晋子
いさかうの酒ふさ金ものつ山ろ　仝
宮ぶ編の竹うつ新田
夏笠ぶ蝶ブトふされうやけ行う　晋子
おむうこうこいつ小俳ゆる
年ぶ夏蜜蜂の樸サクもぶちうく　晋子
常解るうう屋風吾と俗
居事稲こう行沢果ふ赤こみわ　晋子
稗と拾ふ行ふつる俗

幸碓へ雇の去る秋のくれ　晋子

小ちと冷る月はさ行

雪踏しろ見るまうの岡の松

上ゆりふ法て亟堅　晋子

小栗清むか言文セて高雪　晋子

花のさかえを嚴筆用

人物と人のなるやむ耕す　晋子

多入ゆる猿うむ栗

苔のみしふ保紙乃幕　晋子

元禄七年

一紙をもふすゝ解

きう袴雪紙ゆ踏うん　晋子

月更て十ゥかゝすや枕

いゝの菜子や貸戸の内　晋子

ちやきをもて雪紙海

吉原ゆ下ふ姫ハ寄うゝ宗　晋子

多中ハ方姫を行ぬ大原乳

使のものをかむる　昇吳　晋子

月

さうき竿しをを形よ弱りし

夜半の月てうれが音を生せるや　晋子

花はうつと立ぶ笠うう楊枝庵

玄のあるうやまよりいく令　晋子

十文や五ちく宮の紫門

五六分ふ紫のはまるとうる線　晋子

耄てさへ孫よち花をありしぬ

曲池小魚を繰るのいま　晋子

建ちるうちうふ華

家窓ふく二人八ちはる蛍　晋子

背へかうるふ紫ある風呂の月

西瓜のはは　爆きハはく　晋子

林の遠くうふ鶴の羽

花

はしうう酒八十わると花の色　晋子

秋ふ屋角かうまの風

五月雨

茅屋ちはまよ蜂の　鄰　晋子

横簾ふ帳蓋の雨を吸て

麻花うへ　棒を投ると　晋子

元食のけふ小勢寂する　奴

市原しぐれしを今を端くく　晋子

一なておとてあとてつかうと花盞

母の作りし岩又　入乃屑　晋子

名臭さらに仕く通る　侍

略よ数代の打さる松の海苔　晋子

元禄七年

初ん子うよ第様すみとうと

女人堂ふく　法もおとあり　晋子

角力の地とかなて名を分

社さへ五帝十帝　立ちくび　晋子

軍をかしを祖父ふ西

渕八衛ふ慶塙の上を色　晋子

浪塔のひうをを扇うく

車ふをこふ　サ数乃　ヲうり　晋子

山乱の西節義数しふ事

獅子の中ふ立つる石や花の陰　晋子

かしこ手ふ受戒の児の白糸絡

能さし矢んよう使かさる表　晋子

衣桁の小袖落る音すゝ
生かゝる蚤とゆるゝ物かりい　晋子

白粥のさゝる日暮し思俺
書物とあいもとろふ短尺　晋子

桜行のおるゝふ十悪
寒ゝや松ゝも怪々男ゝ子　晋子

某ゝも加まりて通る帆舟
地蔵を建し夢の除稽　晋子

手ぶらして赤阪人る大井殿
れうしくあるゝ百姓のら　晋子

元禄八年

法用とて御室出を抱むと
紅衣の醫師の後ゆる　杖　晋子

林影を積む石花売のら
秋通る中山乃ハゝ妙怨し　晋子

背戸の畑を物語ふあゝん
陽炎の那粉よ物る出をゝし　晋子

大きなる石と苔深き城の城

かなたの竜のとの戸は酒屋あきらめて　晋子

ちらほらと紅人の袖をとらえ

廿九　柳の葉先とくべく嶮　栗　懸　晋子

甚兵衛　碁盤池の　サヤ　ハ　角組

元禄八年　晋子

山吳服屋人あてもり寄

こまかな鈴なるもんなやく　晋子

元禄九年

七種や勝を忘れし男を

一筋は行きまぜ風巾は骨組　晋子

卅二　御昔の白ひとえにあること

押絵ちくく人ハ来ぶ袖ぬて　晋子

絵の写るもるもの和の花

卅三　琴を抱くカハ乳母と二人じて　晋子

絃をかくしたいぬきし夜の月

半ばより使よく車　押入寄　晋子

秋吾やうふかゆる 夜物
抱り琴の袋をつる庄少繁 晋子
夕月夜ゆゑ行と待る遠かな
雪ふ出ける 惟高の改 晋子
狭を かしく金 新る 新
庄之末を書ていく 晋子
立やうや 伝の 紙屋も 晋子
橋板 むかの川 御 晋子
石の 史入 御 晋子

吟ぶ 晋子
吟味 仕つる士ハ 寓 晋子
志賀ゑ男盆の 去て 晋子
元禄十年
庄 貸ハ 肩をゝゝセて夕涼
赤 拭 迷ふ 蝙蝠 晋子
集の 隙 色 羽 晋子
濁酒 出 塚ハ 晋子
什 夜 る て 躍 る 晋子

五

かいろうの気を乃ろ〳〵初尾花　晋子

いそ〳〵く冬を座すも見法乃

川音ふ〳〵浦傳乃綿衣　晋子

脂(アブラ)ぬ〳〵る木枕を拭く

著そ花を青海うる御扣　晋子

青の月の風流を乃る舟の蓑

青ハ蛍子ゑ格の鶏滴(アヒ)　晋子

玄関をふさく甲なるつ

五　春ハも白袋の名をそ　晋子

山伏の初ゑ家を夜老て

月　月ハ俳しき化屋の見分　晋子

惰うる口ハかゝい物嵯

花　穴角キ〻当ちまさハまる花の園　晋子

山かつ〻ぬ〻ぬ〻ぬ〻

ツキ　乃ゑて屋中あゝ伊や失蓮　晋子

牡丹ハ雨のかゝる白へ

花　芋婆ハそ馬ゑ格る花の雲　晋子

蓋の沁乃竹のゝ〻ひす

第三　屋根葺の僧ほうる裏面に　晋子